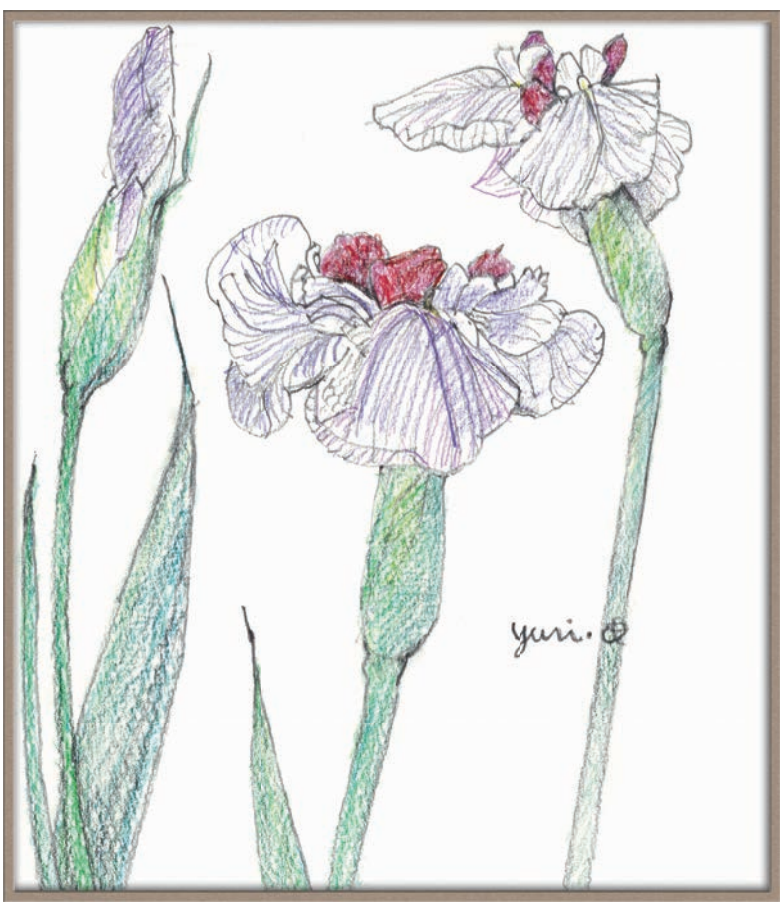
三河アララギ

２０２０年 ５月 皐月 さつき

五　月　号

第 六十七 巻　第 五 号



ニューヨーク日記（163） http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

DISCOVERING DRAGONFRUIT IN HANOI

Blue Shoe Diaries

ベトナムに来て初めてドラゴンフルーツの味に気付いた！見かけに増して美味しいねキュウィっぽいけどもうちょっと優しい感じ。今までも何度か食べてはいるんだけど何とも思った事無かったなぁ、でも今回目覚めました。ベトナム旅行中毎日食べるぞ。濃いピンクと白いのがあるけど味は一緒っぽい？ついでにフルーツ畑もみたよ、常に灯が必要らしくって暗い時畑を通ると木の周りに電気が付いていて何となくクリスマス。

I'm just waking up to see how good dragonfruit really is. And did you know it's a cactus? I've had the fruit several times in the past but didn't think much of it. Until now, in Hanoi. I can eat this every day, and I'm doing so every morning while in Vietnam. Tasting fruit and vegetables at their prime is like eating a different food altogether. I got to go by a fruit farm that cultivates them too. They need light to grow so if you notice twinkling lights in the darkness in Vietnam, you're likely passing by a dragonfruit farm. It's like Christmas all the time!

目次

第六十七巻第五号（通巻七九七号）

表紙・いちはつ　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（163）　Blue Shoe（2）
アカンサスの徑　御津　磯夫（4）
ははきくさ　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々」　今泉　米子（6）
ははきくさ　河原　静誠（7）
和雅院椿　岡本八千代（8）
ひと雨ごとの　弓谷　久子（10）
木花咲耶姫　今泉　由利（12）
祝い凧　安藤　和代（14）
カタクリの花　清澤　範子（15）
「神」　伊藤　忠男（16）
待ち遠し　矢崎　直人（17）
パニック　森岡　陽子（18）
妻の手術　白井　信昭（19）
蒲公英　杉浦恵美子（20）
開花宣言　阿部　淑子（21）
三月の風　山口千惠子（22）
『ことよせ』　いーはとぶ
吉見　幸子（24）
水野　絹子（24）
鈴木美耶子（24）
牧原　正枝（24）
石田　文子（24）
稲吉　友江（25）
三田美奈子（25）
森　厚子（25）
山崎　俊子（25）
牧原　規惠（25）
現代学生百人一首　東洋大学
阿部健太朗（26）
岩崎　心紀（26）
中村　叶恵（26）
高田　乃瑛（26）
中村日名子（27）
根岸　颯汰（27）
奥村　晴（27）
宮野　結衣（27）
森岡　陽子（28）
高橋　育郎（30）
森岡　陽子（32）
松本　周二（32）
山迫　京子（32）
田中　清秀（33）
浜田　紀政（33）
重野　善恵（33）
山元　正規（33）
植村　公女（34）
今泉　如雲（34）
今泉　由利（35）
杉浦　弘（35）
田中　清秀（36）
丸山酔宵子（38）
山本紀久雄（40）
今泉　雅勝（42）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（44）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（46）
漢詩研修（四十三）　平井　茂行（48）
多摩川の桜と玉川碑　中屋　保之（50）
野村克也氏の逝去を悼み作有り　横山　精真（52）
仏像彫刻（四）　藤崎　徹（54）
『読ませていただきました』　今泉　由利（56）
「氷魚」のことから（232）　岡本八千代（57）
編集室だより〔二〇二〇年三月〕　今泉　由利（58）
野菜・果物・まんだら（27）　（59）
「三河アララギ」について　（60）

『俳句』
童謡　歳をとっても
贈呈誌
かさね吟行会
『酔いの徒然』（97）
楽しい時間（90）
絹の話（114）

アカンサスの徑

御津磯夫

池ひとつめぐりゆきつつ水を見ず汀の草の萌えに注意す

朱にたつ塔のそがひももとほりて衆病悉除をわが願ひとす

身にやまひなければよけむ八日ごとにみ扉ひらく薬師の塔は

涌きいづる水とこしへの乞ひねがひ彼岸に對ふ出島踏まるる

ひとときの信なればなほ慾ふかし淨土の草をぬすまむとする

ほととぎすに似て似ざる草の青き萌えわれは拾はむ塔の下より

観光バスここにもはやく乗り入れてせまき淨土を踏み荒らさしむ

ゑらぎつつかたまり押しよする若きらにさからひてせまき山門を出づ

淨土いづれば何にせかるる呼びたてて處女に包ます蕨葛餅

門前のわらびのもちの軟らかし提げて住吉の病む子を診にゆく

ははきくさ

大須賀寿恵

持ち帰りし仕事そのまま机におきて白けし炭火に餅焼きはじむ

御用納めの式が終れば未施行の書類も机におさめて帰る

祝儀袋に入れし災害勤務の手当貰ひ事多かりし年もすぎゆく

独り身のわが当てもなく街にいで風呂敷包みをさげて帰り来

三日間の休み続きし事務室に水仙の花の水かへてをり

意地悪き係長の下のふた月に笑にまぎらす術を知りたり

この職場に十三年の古参にてマンネリズムのそしりまぬがれず

矢作川の中に一條の葦しげり浅き流れの川つくりゐる

カリエスの再発です今一度ギブスコルセットはめてみますか

レ線写真の説明してゐる医師の顔が次第にぼやけて見へなくなりぬ

歌集「續草々」

今泉米子

ゆくりなく詣でし宇治の黄檗山ここに香椿の一木を知りぬ

常ゆかぬ庭山蔭に香椿に似ると見に来ぬ櫨の老木を

仙のごとき人の報らせし姫塚を今日の秋晴れに訪ねかゆかむ

村人ら守りつぎきて黄の白の菊供へありこれぞ姫塚

照り厚く定家葛は塚なして姫の姫塚の祠を包む

丹野城滅亡のときに自刃せし姫を伝記につたへ残しぬ

自刃せし姫とのみ人の伝へつつ石の祠に供華あたらしき

刈株田の一隅区切りて濃緑の定家葛の下の姫塚

わが祖にかかはりあるも無きもよし姫塚の祠愛ぐしすがしき

昨日見し小さき姫塚おもひをりいま降りいでし秋ふかむ雨

ははきくさ

河原静誠

濡れぬれて立つブランコを園児等と窓にならびて今日も見てゐる

十年前蕨つみにし真福寺を今日訪ぬればアパート並ぶ

師の君に賜ひし黄色の水蓮の花二つ三つ朝毎に咲く

赤のまんまかやつり草の生うる野路蝗追ひつつ園児等とゆく

学寮に学び徒歩にて登りにし四明の嶺を今日ドライブす

吾が疲れおもひたまひて下されし事務机の上のノボタン

刈萱にりんどう一輪摘みそへて仏にささぐと家路いそぎぬ

主なき十王堂の裏庭に白き糸萩の花ゆれやまず

人絹の袷の羽織縫ひかねて針なげ捨てしは二むかし前

珠数珠の葉づれ聞ゆる丸窓に破戒の尼のわが対ひ居り

和雅院(げ)椿

蒲郡　岡本八千代

思ひ出は遠くなりつつも今日は思ふ和雅院さまにいたゞきし椿よ

ほほゑみて君はやっちゃんにと下されしそのくれなゐの五弁の小ささよ

降り出しし春の雨にも雫して和雅院椿のほのひかりかな

ゆっくりと一度話をしてみたし新型コロナを如何に思はるるや

コロナのため公民館も休みにて家と庭まで他いづこへも行けず

だんだんと歩けなくなる予感するああ今日も海への小道の恋ひし

友達も誰ひとりさへわれに来るひとりも無しにけふも暮れゆく

友ひとり来たりて菜の花大根など持ちきてくれたり涙がにじむ

杖にもたれ庭に佇ずむひとりの婆さま久しぶりなる夕焼の中

微熱とれて夕べの食欲すすむなり「うまいなあ」のわがひとり言

心配せし微熱もとれて一年間の一の八組の班長も終了

何の木か四万十川の雑木にて作られし小さきまな板出てきぬ

小さき小さきまな板を今日より使うそのことだけが嬉しかりけり

春のま夜刻々とすぎていつしかに海の方東（かた）はうすあかりして

立待月すぎてこの夜の光淡しいつまでかわれこの空の下

ひと雨ごとの

豊川　弓谷久子

蕾まだ固き小枝を五六本瓶にさし置く桃の節句に

恒例のお雛祭りの招待も断りこもりゐる三月三日

又今日も雨となりたり三月は一雨ごとの暖かさかと

水仙の花白じろと咲き揃う姉の遺せし唯一の花よ

墓じまいの挨拶受けをり父と母兄を葬りし故郷の墓

久びさに訪れ見たる故郷は変り果てをり道に迷ひぬ

凡山の中程にたつ父母の墓別れ告げをり仰ぎ見ながら

もう二度と来る事あるまじ凡山と呼びて馴染みしこの山も

伸びし髪子が切り呉れたりさっぱりと心も軽るし今日春日和

大木の椿の木下に今日も佇つ散りたる椿のくれないの色

我一人の小さき野原たんぽぽの花一面に咲きゐる野原

杖つきて露地裏抜けて細き道一人の世界を今日のたのしむ

育て来し豌豆の実を今日は摘む手のひらいっぱい初摘みの実を

満開の上野の桜がテレビにうつる花見る人の無き画面なり

コロナウイルスに始まり終るか弥生月先の見えざる不安残して

木花咲耶姫

東京　今泉由利

最接近赤赤赤く登りこし今年この日のスーパームーン

目に見ゆるほどの速度に登りくるこの日ばかりのスーパームーン

昨宵のスーパームーンの過ぎゆきぬ今朝は太陽ひとつ窓の辺

一秒に三十キロの光速の一年分を一光年と一年手帳に

月をいで1・3秒の後にして私の窓に届きぬ月光

月までの距離と同じき三十八万キロ体感したりきドライブ記録

千年の時を過ぎこし地蔵菩薩といま彫りあげし地蔵菩薩と

10^{19}乗光年先に西方浄土のあるといふ鉛筆もて計算してゐる

こんなにも大きな変化のありしことチェックをしつつ浮世絵をゆく

富士山の山霊鎮む木花咲耶姫逢ひにゆく道階（きざはし）のぼる

黒々と古木の胴に初々し一輪咲きぬ初桜花

吹き溜まる桜花びら抄（すく）ひあげもう一度散らすもう一度吹雪

火星まで行きて戻ると三年とメモのいできぬ大掃除

備前なる土塊（つちくれ）にして２kgほどすり鉢形をなして焼きあぐ

自然界にもっとも重く存在す原子核のその名はウランと

祝い凧

豊川　安藤和代

葉牡丹のうず日び高くなる朝曽孫誕生の友の喜び
用水の流れはなくも岸は早やよもぎ小さく目覚めておりぬ
寒いから風吹くからと怠けいる吾を横目に庭草の伸ぶ
初孫の名前大きく祝い凧渥美の浜を雄々と舞う
移り気な天候ゆえに洗濯物入れたり出したりひと日が終る
宿舎なる孫を思いて飾る雛「ひなの」と言う娘二十一才
満開の杏の枝に陽のひかり二羽の目白をやさしくつつむ
いつも来る娘の来ない日曜日ひとり細細夕餉支度す
いづこから鳥運びしや裏庭に万両の芽の小さき育ちよ
この月も孫詠む歌の多けれど吾が詠む歌はしあわせの歌

カタクリの花

春日井　清　澤　範　子

コロナウィルス春日井にも松本の姉の法要を見合わすと決める
インフルは早めに打ちてありたるに次はコロナの困悪なりや
町内の役員の努めを果すため町内規約に目を通すなり
コロナウイルスの状況日々に変り来てわが春日井にも発生したる記事
コロナウイルスマスク大きく耳にかけ役員の引きつぎまずまず終る
予報士の伝うる陽差しがありつつもふんわりボタン雪椿の葉上に
低気圧に風強く吹く玄関の木犀の若芽幾分散らして
玄関の日々草に水をやり空見上げればうす赤き月
吾が郷の豊田市足助香嵐渓今日新聞にカタクリの花
紅白の椿の枝に椋鳥の枝渡りするを楽しく見つむ

神

大阪　伊藤忠男

「神」人に解けぬ難問与えぬと信じ明日(あした)を夢見て進む
昔より人は戦い乗り越えた流行り病に争いの危機
危機を危機なると見極め予測すら出来ぬが哀れさりとて哀し
和歌山にこもりモバイル前に置き見えぬ問いかけ見るは文字のみ
肌触れぬ手取り肩組むことも無しストレスたまるネット飲み会
外出を控え人とは会わぬ日々言葉忘れてしどろもどろに
人多い都市に3密生む土壌地域分散生き延びる道
平凡な暮らし待ちわび過ごす日々幸せ何かと問いかける今
席空けて座る葬儀の寂しきや悲しみこらえ一人嗚咽す
冬去るも今年の春はほろ苦し心癒すか菜の花畑

待ち遠し

東京　矢崎直人

日記より戦争中の日本人ドナルド・キーンの読み解きてゆく
宛先に「怒鳴門鬼韻（ドナルド・キーン）」と送られて「魅死魔幽鬼夫（三島由紀夫）」と返したること
この国の危機いかに生く渡辺一夫「敗戦日記」
日常を失いゆける今だから心支える文学求め
失った大きなものを語る人その言葉には命の重み
どのくらい時間をかけて知る言葉過ごした人生教える意味を
師の手紙部屋にて読める春の雪「読書は力　我等は強し」
花のように思い切りよく咲ける日の今はただただ待ち遠しくて
とりどりの源平桃の蕾かな赤か白かと咲くの楽しみ
菜の花の上の風車のゆっくりとゆるりゆらりと春の風吹く

パニック

東京　森岡陽子

初桜水やわらかき多摩川のこの一時の静かさ楽しむ
姿なきパニック映画のごとくなりコロナウイルス世界パニック
三椏の咲初む先に古本屋葉書求めて友へペン取る
染めそむる桜並木は薄紅色小さな小さな蕾が沢山
春めきてのんびり散歩と向島言問団子一皿おかわり
川岸の日々移ろひて草萌ゆる瑞々しくも柔々しくも
菩提寺の鐘楼横の大樹には潜れる雀の賑やか囀
桜の名プリンセス雅子花盛り北野神社の境内あざやか
密やかに菫の花は逞しい今年も我家の塀の角に開花

妻の手術

豊川　白井信昭

開院前コロナ感染者受け入れし三河の大地に医の鑑ならむ
孫来るに嬉しさあるも煩わし妻の体調気づかう食事
さ庭辺の物置小屋にチューリップの尖り芽小さく柔らかくいづ
フリージャー花壇の中に芽をいだすポストまでの路(みち)日の当たる所
紫の花片(びら)咲き継ぐノボタンの軒端にゆるる西風(まぜ)吹くひと日(ひ)
わが妻の今日という手術われ家に腎臓摘出無事を祈りつつ
点滴の妻を従兄弟は二人して献身的に尽くしてくれぬ
八階の静かな個室窓の外ふき募る風春一番か
堤防沿いひと列白く咲き揃う日本スイセン今を盛りと
み社の春を先立ち咲く椿赤く彩り落ち散らばれる

蒲公英

蒲郡　杉浦恵美子

有田から武雄吉野ケ里飯塚の夫との旅も明日が終着
何故夫が鉄道ファンか今解る直方駅の線路夥し
筑豊は御三家ありてその蔭に作兵衛さんの炭坑記録画
我が此処を訪ねた訳をとはずがたり直方名物成金饅頭の店
遠賀川中島橋畔木屋瀬宿夫の生地ぞ雨中に訪ねん
雨強し荷物は重し背には夫中島橋をとぼとぼ渡る
中島橋渡った先に何がある何もなくとも渡らん今は
三月は母の命日春分と過ぎて仕舞へば春愁茫茫
憂はしき世間の日々ぞ気晴らしに野に出で摘みぬ蒲公英百本
蒲公英を籠に満たして野を行けば何にするのと擦れ違ふ人

開花宣言

横浜　阿部淑子

靖国の開花宣言に微笑むも午後にはぼた雪舞いて驚く

高齢者のコロナ感染重篤と「駄目よ外出。」厳しい声かけ

連休の桜に誘われ気もゆるみ感染拡大首都圏に危機

刻々のコロナ情報重ね聞き顔面ピクピク心痛募りて

家に居てコロナ対策心がけ家族と過ごす貴重な時よ

東京の五輪延長決定し安全対策万全期して

三月の風

豊川　山口千恵子

燃え残りの蝋燭横に片付けて秋葉神社に燈明あげる

日に幾度も電話かかりてくるけれどセールスなどで大方用なし

われのこと奥様ですかと言ふ電話今日もかかりくるセールス電話

公報の三月号をくばり終え組長の仕事一年終はる

連休のニュースはわれには係はりなしただ毎日の暮らしあるのみ

あたたかきお茶を飲めばわだかまる心静かに落ちつくといふ

やはらかく湯気立つ湯のみ手につつむいれたる緑茶の色のよきかな

電柱の天辺にとまりなきてゐし鳥この頃姿を見ざり

一面にはびこるみどりのはこべらをはぎとるごとく取りてゆくなり

着やすさにこの冬着つづけこしセーター毛玉出来たり袖のあたりに

ふっくらと御飯たけたりメロディーに知らせてくれるわが炊飯器

水甕の水飲みてゐる野良の猫飲み終へのっそり庭出でてゆく

風に向かひ自転車走らせゆくわれの頬にやさしき三月の風

沈丁花の香りときどきかをりくるかがみて庭の草取りをれば

何故かトイレットペーパー売切れて棚は空なり今日も買へざり

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

亡き母の最期の姿抱き寄せて「後はまかせろ」と夫は言ひにき
はなれ座敷外装すっきり甦る庭の白梅咲き初めしころ

吉見幸子

日本人なればこそ見ぬと夫の言ふ広島すり抜け紺碧の呉へ
鈍行の一駅（ひとえき）ごとにライン来て祖母の私もライブではらはら

水野絹子

沖縄では「なんくるないさ」と言ふらしき「なんとかなるさ」今日の会合も
いつまでも見送りゐたき心地すれど玄関ノブに手を遺る私

鈴木美耶子

首太き野良犬が庭に入り込みてじっと我をば見つめて出でゆく
感染か発症あるかではや一ヶ月コロナのニュースいつまで続くのか

牧原正枝

蝋梅（ろうばい）の黄色花びら愛らしく畑の隅に春を知らせり
豆まきの鬼に慣れたる子供たち恐れず向かひて鬼逃げ回るよ

石田文子

「また来てね」と絵手紙の隅に添え書きす孫への便りは春色切手　稲吉友江

蟠(わだかま)りを持ちつつ歩む散歩道ああ春まだ浅き空の青さよ

春一番知らぬ間に吹きまた冷ゆるこの頃の気候にわれも変かな　三田美奈子

早春の風そよと吹く狭庭(さにわ)べにひそやかに咲く紅馬酔木(くれなるあしび)

夕去りて更地にしたる吾が庭に十三夜の月ほのかに光れり　森厚子

憧れのクルーズ船よりあふれたるかコロナウイルスは隣町にも

朝あけの西空にあり望月のその白清し冴え冴えとして　山﨑俊子

冬のあさ中空を飛ぶ二羽の鳥白き羽裏のあけに染まりつつ

わが畑の雑草落葉をかき分けて若緑なる蕗の薹つむ　牧原規惠

摘みて来し蕗の薹食めば口一杯にかほりの苦み広ごりて来る

現代学生百人一首

東洋大学

上京後一人暮らしでする料理決まっていつも母の献立

東洋大学一年（東京都）阿部健太朗（あべけんたろう）

おめでとうそれを言うのにどれほどの脳内会議を重ねたことか

練馬区立貫井中学校二年（東京都）岩崎心紀（いわさきみのり）

筆動き完成間近あざやかな紙一枚が私の世界

町田市立町田第一中学校二年（東京都）中村叶恵（なかむらかなえ）

携帯を見つめてばかりの若者よ私の祖母に席をゆずって

武蔵野市立第四中学校二年（東京都）高田乃瑛（たかたのえ）

貝がらをのぞけば見える思い出の祖父母の笑顔と天草の海

武蔵野市立第四中学校二年（東京都）　中村日名子（なかむらひなこ）

二歳の子助けてくれたヒーローは優しいこころの七十八歳

武蔵野市立第四中学校二年（東京都）　根岸颯汰（ねぎしはやた）

ハロウィンと子供が騒ぐその奥で秋空彩る完熟の柿

神奈川大学附属中学校一年（神奈川県）　奥村晴（おくむらはる）

願いこめ夢にまでみた初舞台覚悟を決めて楽器手にとる

神奈川大学附属中学校一年（神奈川県）　宮野結衣（みやのゆい）

贈呈誌

森岡陽子

鹿児島アララギ　２月号

郡山禮子

○雨上がる休耕田の鬼火焚き歓声の中高く燃えゆく

浜畑松枝

○冬寒の闇に聞こゆる鈴虫は何処より来しやひとしきり鳴く

奥悠子

○暖かき冬の日差しを背に浴びて素枯れ立ちたる小菊を切りぬ

鹿児島アララギ　３月号

中山タマエ

○快晴の良き日運びし鶴の群れ列整へて北へと消えぬ

重盛ヒサ子

○裏庭の石垣下の火山灰集め運ばむとして忽ち息づく

千葉源治

○人住まず使はれぬ溜池に数百のメダカが帯なして泳ぎてをりぬ

冬雷　4月号

○中海に流れゆく溝深くして投げ込む雪のかたまり流る　橋本文子

○鵯のさぞ口惜しや嘴の届かぬ先の南天五粒　澤木洋子

○寺庭でたく落葉焚きだれの通報か消防車来て大さわぎとなる　大川澄枝

○源流の湧き口見むと歩に来たり盛りの夏の草叢を踏み　赤羽佳年

○若麦にほがら朗らと日のわたり露霜ひかる新しき年　姉川素枝子

○テレビの懐メロに耳かたむけて気に入りのセーターの毛玉とりおり　東ミチ

○「チョイコラサー」声を張りあげ若い衆らススキ揺れゐる被災地を行く　金野孝子

○夕暮れの御堂の戸締りするわれをかすめ飛ぶ蝙蝠ありてのけぞる　井上槇子

○除雪機の出番無きまま春立ちぬ里山にさへ雪は来たらず　小林貞子

歳はとっても元気節

高橋育郎 作詞

元気を出して　行きましょう
一二三　ソレ　二二三
みんな揃って　笑顔になれば
いつかみんなが　笑っているよ
歳はとっても　歳はとっても　元気だ元気

朝は早起き　雨戸をあけて
一二三　ソレ　二二三
空の青さを　いっぱい浴びて
両手をたかく　サア深呼吸
腹は八部の　腹は八分の　三度の食事

健康一番　元気はいいな
一二三　ソレ　二二三
やることまだまだ　たくさんあるぞ
励ましあって　いい風おこそう
元気溌剌　元気溌剌　アアありがたや

歳はとっても　元気で行こう
一二三　ソレ　二二三
喜寿も米寿も　平気なものさ
生涯現役　いつでも青春
夢はでかいぞ　夢はでかいぞ　ドドンと行こう

『俳句』

春の雪蕾に降りてあはれ消ゆ
言葉なく帽子目深に卒業生
御法度も花の根方は宴のあと

森岡陽子

帰る鳥霞ケ浦の帆引船
ふらふらと蜂現るやはやり病
茎立ちの色浮き出でし蕗畑

松本周二

姿なき春一番や窓叩く
高校球児見えざる敵に敗けし春
寄せ植の色を違へて茎立ちぬ

山迫京子

色紙で手折る卒寿の飾り雛
黒土を野鳩ついばむ蕗の薹
初桜地蔵菩薩のさとり顔

田中清秀

瑠璃色に土手を染めをり犬ふぐり
夕闇に解けながら降る春の雪
廃校の子らの空音（そらね）に桜咲く

浜田紀政

近付いて木蓮ならぬ辛夷かな
野辺の花触れる指先初蝶来
墓参済み土手のスカンポ舐めてみる

重野善恵

暮れなづむ垣根の角の坪すみれ
つちくれの陰に色濃き花菫
花菫そびらに白き越の山

山元正規

ビー玉をひとつ拾えり春の土
紙ヒコーキ急降下して春の夢
校門は閉ざされしまま春疾風

植村公女

最北の国府の跡や斑雪山
手巻き式充電ラヂヲ三陸忌
春天は志功の女人観世音

今泉如雲

ニュートンの林檎の木ある春の園
四千種草木（そうもく）にして春始め
四手ゆらし桜東風の通りすぐ

今泉由利

街中の初めての路辛夷咲く
煌として春暁の帚星
一匙の芙蓉の種の賜物
無秩序と秩序のあはひ桜咲く

杉浦　弘

一茶名句集より

〔大正十五年六月一日七版〕

傘さして箱根越すなり春の雨
ほんがりと麹の花や春の雨
これきりと見えてどつさり春の雪
淡雪とあなどるまいぞ三四尺

かさね吟行会
「吟行会が中止になったので」三月

田中清秀

三月十三日に予定したかさね吟行会は新型コロナウイルス流行の騒動により中止となった。この原稿を書いている三月二十三日現在、パンデミック（感染爆発）として世界的規模の大流行、日本国内の多くのイベントの中止や小中高校の休校、また、株価の大暴落など大きい経済的影響が続いている。さらに七月の東京オリンピックの開催も危ぶまれる状況にある。

今後の社会的な混乱は大いに心配されるところだが、この機会にこの紙幅を頂き、今までの吟行会について少し振り返りをしてみたい。

かさね吟行会は平成二十四年に新宿御苑で一年間通して同じ場所で開催した後、毎月多くの庭園や寺社仏閣、町並みなどを訪れている。回数で一番は清澄庭園でこの正月の新年会が六回目となる、他は目黒自然教育園、向島百花園、東工大界隈、飛鳥山公園、小石川後楽園で各二回行って、すでに通算八十回となっている。また、場所で多いのは区分が難しいが、公園の十八回、庭園が十回と回数が多い。やはり吟行は景色が綺麗で広々としたところが好まれるようだ。

一番遠いのは我孫子文人別荘と手賀沼で、文人達の別荘地帯に続く手賀沼周辺と対岸の模糊たる松林や杉木立の風景は今も鮮やかによみがえる。文人カレーもまた思い出の味である。大磯への吟行も遠い範疇だろう、西行法師の名歌に由来した鴫立庵で行い、ここは日本三大俳諧道場と呼ばれ、落ち着いた邸宅と石に刻まれた多くの句碑が記憶にある。また、大磯海岸で見た丹沢山系から飛来するアオバト観察も興味深いものがあった。やはり遠方に行っただけ思い出深いもとなり印象に残る、また、作品の俳句も気持ちの入った秀作が多いような気がする。

近郊では、アクアラインの海ほたるで行った木更津への旅がある、證誠寺のポンポコ狸や東岸寺の藤棚も見事だった。また、横浜のみなとのみえる丘公園や外国人墓地、異人館など文明開化後の異国情緒を偲ぶ散策も楽しい吟行となった。

美術館では五島美術館と東京都庭園美術館が秀逸で素晴らしい芸術品が印象にのこっている。変わり種は上野動物園とすみだ水族館、葛西臨海公園のバードウオッチングだろう。象やライオンなどの動物、魚やペンギン、海月も俳句で詠み込めるとの思いを強くした。森羅万象すべて俳句の素材である。

界隈の散策で思い出は、佃島で家屋に隠れた地蔵菩薩

の不思議なお堂をのぞいたこと、墨田川の河口の景色と磯の香り漂う老舗店で買った佃煮のお土産、みんなで食べたもんじゃ焼きも忘れがたい味のひとつである。

ここでひと言添えると、我々の吟行はなぜかいつも晴れる、この天候に恵まれるのは世話役の森岡さんが自他ともに認める「晴れ女」とのことにあり、無くてはならない有り難い存在である。

吟行は、公園の方が俳句を作りやすいと言われている。色々な人達が集う場所であり、たくさんの花や樹木があるので題材に困らない。さらに、植物に名札や鳥の案内番が付けてあると図鑑がなくても作句に助かる。釈迦に説法だが、吟行では、目についたものを直ぐにメモにとり、その上で五七五にまとめる、そしてとにかく思いついたらたくさん詠むのがコツだそうだ。

「かさね吟行会」の開催は足かけ八年となる。この間会員の入れ替わりや意見の食い違いもあった、良く続けられたとも思う。でも吟行は、爽やかな空気を吸い日頃の憂さを忘れることができる、みんなで行くと楽しい。今後もできる限り続け、遠方、近郊を問わず色々な場所に行きたいものである。

新型コロナウイルス流行と混乱がいつまで続くのか、本当に心配である。今は、早期の終息を心から願うのみである。

最も多く開催した清澄庭園

『酔いの徒然』（九七）

丸山酔宵子

『八甲田の混浴』

令和2年1月23日の八甲田山は想像を絶する寒さと豪雪。

八甲田ロープウエーの山麓駅からスノーモンスター（樹氷）を眼下に見ながら標高１３２４米の八甲田山田茂萢岳山頂は白一色、吹雪は激しく顔面を叩き眼は明けられず、視界は限りなくゼロ。信じられない寒さと強風で立ってもいられずギブアップ、即座にロープウエイ駅舎に退避。

１９０２年（明治35年）厳寒の冬。日露戦争に備えた寒冷地戦闘予行演習として、日本陸軍第８師団歩兵第５連隊が青森市街から八甲田山の田代新湯に向かう雪中行軍で遭難し、２１０名中１９９名が死亡する「八甲田雪中行軍遭難事件」。1月23日はその命日である。

新田次郎の名作「八甲田山死の彷徨」を基にした映画は、１９７７年、森谷司郎監督、高倉健、北大路欣也ほか豪華出演者で制作され、青森歩兵第五連隊神田大尉役の北大路欣也の最後に叫ぶ「天は我々を見放した」は当時流行語になった。

余談ではあるが、その雪深い現場にある慰霊塔周辺で起こった事実を想像すると人間の極限の姿をひしひしと感じる。通信手段もない猛吹雪の視界ゼロの中で、もがき苦しんで数日間昼夜に渡り彷徨し続けたのである。しかし・・・無念にも、その兵士達の彷徨い続けた場所は、僅か７００メートル四方であったそうだ・・・。

世界最大の山岳遭難事件から１１８年。今では八甲田山の魅力に憑りつかれたスキーヤーやスノーボーダーが、極上のパウダースノーと巨大なスノーモンスターの虜となっている。外国人も多く、山麓駅には、カリフォルニアやオーストラリアからの団体スキーヤーがカラフルなウエアーを着て賑やかに楽しんでいる。

冷え切った体を温めるには八甲田山の秘境混浴名湯「酸ヶ湯（すかゆ）温泉」。

酸ヶ湯と言えば「ヒバ千人風呂」と呼ばれる混浴の大

浴場。ここ酸ヶ湯温泉は、昭和29年に数ある全国温泉のモデルケースとして「国民保養温泉地第1号」の指定を受けたのだ。津軽の生んだ世界的版画家「棟方志功」も酸ヶ湯が大好きで、湯治を楽しみながら作品を彫り、館内にも何気なく迫力ある傑作が飾ってある。

酸ヶ湯の古き良き伝統文化「混浴を守る会」の永久名誉顧問である「三浦敬三」もこの湯をこよなく愛し、息子の「三浦雄一郎」がそれを引き継ぎ、「八甲田は我が心のふるさと…」と酸ヶ湯の湯を楽しみに訪れている。

期待を胸に年甲斐もなくワクワクしながら混浴風呂に入っていくと、湯煙で充満し視界不良。女性の声に目をやっても輪郭すら見えない。しかし、大きい風呂場に響く艶やかな女性の声は、若々しそうに聞こえ、十分に想像を掻き立ててくれる。

吹雪く夜や桶の音消す艶の声

酔宵子

楽しい時間　90

2020年3月31日

山本紀久雄

神にならなかった鉄舟・・・その二十

前号で昨年4月9日に明治神宮社務所から正式許可を受け送られてきた「画題考証図」、これは間違いではないかと明治神宮担当部門に問い合わせしたことを報告した。

その後、回答が届かないので、再度、「画題考証図」の出典を国会図書館で調べた結果、この図は『聖徳記念絵画館　壁画集解説（坤）』（明治神宮奉賛会　昭和11年）の「十三　江戸開城談判」、つまり壁画であるので、明治神宮に、お送りいただいたデータは「壁画の解説」であり、『壁画画題考証図』ではないと判断できる旨を伝え、当方の検討結果にご指摘があればご連絡いただきたいということを文書にて連絡したところである。

これまで検討してきた『画題考証図』、明治神宮社務所から正式許可を受け送られてきたものであるからと信じ、これに基づき二世五姓田芳流が『下絵』と『画題考証図』を描いた際に、海舟が持つ刀の位置を、『下絵』では右脇に、『画題考証図』では左脇に分け変え描いているとお伝えした。

また、これを受けた結城素明が『壁画』を描く際、この刀の位置に疑問持たず、左脇のままで描いたと結論化し、素明が疑惑をもたなかった背景を分析した結果、素明の人間特性にあるのではないかと述べた。

その出所は『白河を駆け抜けた作家たち』図録で、この中で「結城素明と白河」を執筆した藤田龍文氏が《「先ず自己の頭脳を作れ」素明の言葉である。自己の確立、新しさの追求、幅広い教養が必要かつ重要だと説いている。素明の人生そのものを表現した言葉に思える》を拠り所とした。

藤田氏の言葉から推し量れるのは、素明は、常に明日に向かって動き回っており、その結果を絵と筆で表現したわけだから、過去と同じ傾向作品をブラッシュアップするのではなく、新たに脳細胞にインプットした材料をもとに作り上げる制作方法を採っていた。

つまり、その時に描いた作品が、その場の素明の姿を示すという制作方法ではなかったかと推測した。

したがって、常に、他人の思惑は関係なく、我が道を、我が信じる生き方で進む生き方を貫いた結果が、今日の評価なのであって、他者からの評価は素明にとって無関係であったのではないかと割り出したわけである。

同様に『江戸開城談判』壁画の刀の位置なぞ、どうでもよかったのではないか。二世五姓田芳流の『画題考証図』に疑問持たず、聖徳記念絵画館の希望するように描くというのが、素明の描き方、つまり、生き方であったのだろうとお伝えした。

随分、遠回りしたものである。素明について研究し過ぎたきらいがあった。全て明治神宮から正式に送られてきた『画題考証図』の取り違えからである。

いまさら文句を言っても始まらない。やはり、史料と資料の探索は自らが行わなければならない。深く反省し、今後の糧にしなければいけないと再確認しているところである。

このタイミングにある方からご連絡をいただいた。

《結城素明という画家が、絵画を描く上での心得を「先ず自己の頭脳を作れ」と何とか述べているが、これは私にはどうもつまらなく思われる。そこに感じられるのは「常識の臭い」であって、これが素明をして芸術から遠ざけているのではないか》

このご指摘、非常に鋭いと感じる。また、これが素明の弟子である東山魁夷からの指摘につながるのではないかと思った。東山魁夷は、昭和60年（1985）に山種美術館で開催された特別展の図録『結城素明―その人と芸術』に、「結城素明先生を偲んで」の一文を寄せている。《大正15年（1926）の春、私は東京美術学校日本画科に入学した。先生は私が美校に入学する前の、大正期初期から終りにかけて、最も華々しい活躍を続けた。

昭和になってからの先生は、2年に『山銜夕暉』、4年に『嶺頭白雲』、9年の『炭窯』、10年に聖徳記念絵画館の『江戸開城談判』と、力作を次々に出品された。

先生からは「平凡なものを緻密に見れば、非凡な発見がある」「心を鏡にして自然を見ておいで」と言われ、現在に至るまで私の心に深く刻まれている》

ここで重要なことは東山魁夷が素明の絵を「傑作」とは言わず「力作」と称していることである。

「力作」とは、「その人なりに全精力を傾けて仕上げたという印象が感じられる作品」（新明解国語辞典・三省堂）で、「傑作」は、「すぐれた出来ばえの作品」（同辞典）である。

昭和を代表する日本画家の一人で、文化勲章受章を受賞している東山魁夷は当然「傑作」と「力作」の区別は分かっているはず。その魁夷から見ると、やはり素明の作品は「力作」という判断で、傑作とは評価されない作家であったのだと思う。

長い間、くだらない思考蛇行をしてきたものである。しかし、二世五姓田芳流の『画題考証図』は、『明治神宮叢書第二十巻図録編』（平成十二年十一月一日発行）の「壁画画題考証図」によると次の絵であり、左欄外には「壁画画題考証図」と明記されているので、これが正しいと判断するほかない。

結局二世五姓田芳流は、『下絵』と『画題考証図』において、一貫して海舟の刀位置を右脇に描いていたのである。刀の取り扱いと作法・常識からみて当然の描き方である。

海舟の刀位置を変えたのは素明である。何度も素明に関して述べることは気が重く煩わしいが、再度、刀位置について検討しなければならない。

『江戸開城談判』壁画の奉納者は、侯爵・西郷吉之助と伯爵・勝精である。この二者は慶應4年（1868）3月14日における「西郷・勝」会見の末裔であるから、奉納者の強い希望が反映したのであろうと容易に汲み取れる。

素明の脳細胞には、壁画奉納を担う献金者の意向を忖度するという「常識」感覚が根付いていたのではないか。次号でも検討を続ける。

絹の話（114）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

フランスは日本の絹産業の恩人

ルイ王朝と絹産業

絹の製法が東ヨーロッパ（トルコ）に伝わったのは6世紀といわれています。ローマ時代から中央アジアやヨーロッパの貴族達は何とかしてシルクの製法を入手いたいものと色々な策を廻らしていましたが、中国の歴代王朝は蚕の卵の持ち出しや、その製法を黄の時代から3千年のながきに渡って秘密にして来たのでした。

それは黄河周辺の漢族が絹の製法を確立して、絹をもって西方から各種種子、鉄、馬などと交易し、兵にも絹のフエルトを着せ、強大な国を作る礎になって来たからです。13世紀になってフランスのルイ王朝が強大になって来ると自国で絹を作り、貴族達にふさわしい衣装を作ろうとリヨンに各地から、染織、織物の職人（ギルド）達を集め、中国に勝る絹織物文化を作り上げて行くのです。

ヨーロッパに微粒子病が発生

繁栄を極めたフランスの絹産業は１８５０年～６０年にかけてフランスを中心にヨーロッパ全土に、蚕の幼虫期（２～３齢期）に小胞子虫が蚕に寄生し、蚕が死んでしまう微粒子病が大発生し、ヨーロッパの絹産業が壊滅的ダメージを受けてしまいました。

そこで新たな蚕種製造が渋沢栄一らによって確立された日本から、病気に冒されていない蚕の卵を大量に輸入しましたが微粒子病は終息せず、日本の蚕種業を潤しましたが、最新動力製糸工場なども稼働出来なくなってしまいました。

その様子を幕末に幕府会計方としてパリ万博に派遣された渋沢栄一はつぶさに見聞し、人脈も作って来ました。

パスツール、微粒子病発見

フランスのワクチンなどの医療法を開発した細菌学者ルイ・パスツール（１８２２～１８９５）が微粒子病を発見しましたがフランスの養蚕業は再興せず、アヘン戦争で混乱し、イギリスに支配された中国から輸入する事も出来ず、絹生産の勢いが高まる日本が注目される事になり、フランスは自国生産をあきらめ、後進国を指導して、安定的に輸入する政策に転換して行くのです。

富岡製糸所とパリ万博

１８６７年のパリ万博には幕府と薩摩藩、佐賀藩など

が参加し、「四季花鳥の図」等の絹織物や日本の着物姿の女性の茶の湯接待などがジャポニズムブームを巻き起こしました。参加していた渋沢栄一はフランスの製糸工場なども見学していましたが、１８６８年大政奉還の報を聞くと急遽帰朝し、政府高官となってフランスの最新製糸工場の誘致を画策し、伊藤博文の命により明治５年にフランスの製糸技術者ブリューナを招聘して富岡製糸場を開設し、日本の近代絹産業の礎を築きました。

フランスへ留学生派遣

富岡製糸場を通して日仏の需要供給の流れは結ばれ、富岡で生産された絹糸はフランスのリヨンに運ばれて行き、市井の農家の絹糸はアメリカ等に輸出されました。

日本ではより付加価値の高い絹織物を作るため、１８７２年に京都の西陣を中心に、養蚕、紡績、図案、染色、織物など各人目的を持って第１陣を、翌年第２陣、１８７７年には第３陣の留学生を派遣し、フランスも彼等を暖かく迎い入れ、惜しみなくその技術を教えてくれたようです。

この成果が日本の絹の世界的評価に繋がってゆくのです。この留学生達が中心となって開かれた絹の専門学校が今日の京都工芸繊維大学、東京農工大学、信州大学、群馬大学です。

農商務省原蚕種製造所（後の蚕業試験場）設立

江戸時代までは絹の輸入国であった日本は、明治になって飛躍的発展を遂げ、主たる輸出品に成長しつつありましたが、各地の蚕種がバラバラで糸質もフランスやイタリア、中国にも及ばないものでした。

そこで政府は全国の蚕種、元蚕種の改良統一を図るため、１９１１年（明治44年）に農務省原蚕種製造所（後の蚕糸試験場）を東京、京都、群馬、福島に開き、主に蚕種の製造と品種の改良行ない、その結果良質な日本の生糸が生産され始めました。その後この試験場は沖縄まで全国各地設置され、この年蚕糸業法も制定して、繭の糸以外の加工を禁じて、日本は絹糸生産に邁進しました。

つかぬ間の繭生産世界一

こうした官民挙げての努力で、１９２８年（昭和３年）には全国２２１万戸の農家で約40万ｔ強の繭生産を果たし、世界一の繭生産国になり、絹が当時の日本の輸出総額の40％強となりました。

ところが、この利益で軍備が拡張され、絹の師匠である中国に侵攻し、顧客である欧米列強と戦う第二次世界大戦に突き進んで行ったのです。

戦中、桑田は荒廃し，戦後繭生産は復興の兆しを見せましたが、新たな化学繊維の登場で、今日では１００ｔ位となり、大量輸入国となってしまいました。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田勇気

2020年4月06日

感染したときの身体のコンディションが大切です

本田カイロプラクティックにいらっしゃる患者さんを見
ているとごくごくたまにですが
入口でアルコール消毒をした後
無意識にマスクの表面や顔を触ったり
スマホを見たりしている方を見かけます
人の振り見て我が振り直せで
皆さんも無意識にお気をつけくださいね
新型コロナウィルスに感染しない様にする
人に移さない　という事は大前提ですが
仮に感染してしまった場合に1番大切なのは
その時の身体のコンディションです
感染時に睡眠不足や疲れていたり
他のウィルスに感染していたり
身体が冷えてたりしていたら
コロナウィルスに負けてしまいます
すなわち
こじらせてしまうと重症化しやすくなります
逆に体調が良ければ
軽症ですむ可能性が高くなります
これは年齢関係なくいえることです
前回の　本田のひとり言　に書きました
カイロプラクティックの施術で身体内の流れをつけて自
然治癒能力（免疫力）を上げる
それ以外には
睡眠（入眠時間）　湯船　ゆたぽん　水分補給　マヌカ
ハニーなどで身体を労わって下さい

2020年4月03日

鬱々となる前に

昨日は風が強かったですね
ヒノキ花粉も多々飛散して
喉のヒリヒリ感だったり違和感だったりを
感じやすいかもしれません
スギ花粉に比べてヒノキ花粉は症状が強めに出る傾向が
あります
もちろん
眼の痒み　鼻水　咳　などの症状も出ます
ついで
ここ最近の気温の乱降下により
発熱　喉の痛み　鼻水などの風邪も流行っています
特に乳幼児や幼児などに多く出ています
それ以外では腎臓や腸からくる腰痛などが原因で風邪
をひきやすくなります

カイロプラクティックとは
脳脊髄流液を生産還流させることにより
自然治癒能力を上げ
人間の本来持っている免疫力や生命力を上げるものです
ですので
施術を受けて湯船につかり睡眠をしっかりとっていただ
ければ本来のとても良い状態でいることが出来ます
部屋に長くいますと身体も固くなり
姿勢も悪くなってきます
そうすると身体の流れも滞ります
ホルモンバランスも崩れ鬱々となりがちでネガティブ思
考になりやすくなります
辛いな とか　不安を感じたら
遠慮なく御連絡下さいね

「江上浩二の独り言」29

江　上　浩　二

令和元年台風15号、19号と防災談義

関東では、地域の防災訓練は9月1日辺りの週末に実施されることが多い。

なぜか?それは大正12年9月1日昼前に東京・横浜、神奈川県を襲った関東大震災が発生したからである。関西や他の地域で大きな災害をもたらした被災日を訓練日にしているところもある様である。災害とは地震起因の建物倒壊、火災、地滑り、津波や台風起因の豪雨、洪水、土砂崩れ、大風による大規模物損等々、書き出しても限がない。防災対策はどんな災害が発生しようとしているのかによって、具体的対策行動は異なる。

令和二年正月早々、なぜだか家族で防災訓練、避難場所などの話になった。

というのは昨秋の東京付近を襲った台風15、19号の際に、行政側から出されたアラート・避難指示が余りにも一般市民が受け入れられないものだった。我が家は地域の役員をしているので、大雨、大風の最中、地元区域のある崖が崩れる恐れがあるので近くの学校へ避難して下さいというものだったが、独居の高齢者と身動き出来ない高齢者を抱える家族の方からアラートの出された深夜に、どうしたらいいのですかという心配そうな声の電話を受けた。激しい大雨、大風の中とても数百メータ離れた少し坂を登る高台にある学校には移動できる状況で無かった。しばらく自宅に留まりましょうとしか言えなかった。後日、台風15、19号の際の行政側の避難指示発令に対する住民の意見ヒアリングが一つは区行政、もう一つは都行政の2系統からあった。

この独り言の原案を書き終えた後に、都行政の福祉関連のフィードバックを頂き、次の三点にまとめさせて頂いた。

行政からの情報伝達に課題（防災メールと無線）
避難所の課題（行けない、運営不備）
災害マニュアルの不備（地震災害が主、＊今回は水害）

家族での話題としては、災害時の初期には行政には頼らず自らが出来ることをする。防災訓練を一番過酷な天候気象条件の時に行うべき。真夏の猛暑の昼間と冬の寒

い暗い朝方とか。一番過酷な環境で防災訓練を本当にやる気が有って実施するならば、今普通に行っている防災米の用意やちょっとした消火器による消火訓練に留まらず、これだけの内容の訓練は最低限必要だという事が分かってくるはずである。備蓄は最低3日分と自宅は比較的安全と思われるので、自宅に留まる事、火災系災害が予想されるケースは失火対策を徹底する、地域でゴミ屋敷や老朽化した木造家屋を事前チェックしておく。災害発生予測時間が昼間のケース、地域には体力のある高校生、大人が少なく、幼児、女性、高齢者と中学生が主で、２０１１年3・11東日本大地震の際はこの状況に近かった。だれが主役で、限定時間内で何ができるか考えたい。

3・11その時の我が家は、自宅に居たのは次男と家内の高齢母親、私、家内は仕事で都内、独立していた長男夫婦、娘夫婦は都内在、しかし長男は静岡に行っていたことが夜に分かった。先ず、携帯電話が通じず、夕方次男とＩＰメールで連絡がとれ、家は大丈夫。私は日本橋の客先の9階建ての古いビルにいて凄く揺れ、地震発生から2時間後位に離れ、徒歩で田端まで帰る、その時間は1時間半、途中半倒壊の古家、ドアが傾いて開けられない家を数多く見る、火災もなく、まだ帰宅困難者は少なかった。田端へ戻ると地元消防団の詰め所で聞くと大きな損傷は発生していないとのこと、少し安堵。家内は職業柄若い女性が多い職場で一緒に待機。深夜3時ごろ長男が静岡から戻り職場待機していたお嫁さんと自分のマンションには戻らず親の家へ集まった。私の友人は駅間で止まってしまった地下鉄の車両に閉じ込められ、運良く暫くして次の駅ホームまで車両が動き、そこで地上に生還。

実際は翌日以降、福島原発の放射線離散問題で世界中が蜂の巣を突っついた状況になった。政治家、自衛隊、米軍、そして電力会社の幹部、現場責任者の方々のストーリーは割愛する。しかし、大学の複数の友人と同期だった福島原発の所長のＹ氏が二年後、過労のストレスもあったかも知れませんが癌で病死されてしまった事だけは記したい。

放射能対策までカバーする防災訓練は非常に特殊である。

最後に令和2年に入っての新コロナウィルス感染拡大も非常に特殊な〝災害〟で、それに対する防災訓練等夢にも想定していなかったというのが本音であろう。

漢詩研修（四十三）

千代田岳精会　平井茂行

七歩の詩

曹植

豆を煮るに豆萁を燃く
豆は釜中に在って泣く
本是れ同根より生ず
相煎る何ぞ太だ急なる

煮豆燃豆萁　豆在釜中泣
本是同根生　相煎何太急

【解説】 三国時代の魏の文帝（曹丕）が、才能あふれる弟の曹植（そうしょく）をねたみ「七歩あるくうちに詩を作れ。出来なければ死刑に処する」と命じた。これに対し、曹植はすぐ詩を作ったという。この詩はその時に作ったもの。ここから、優れた詩を素早く作れる才能のことを「七歩の才」という。ただし、この詩は曹植の詩文集である「曹子建集」に収められておらず、偽作説が有力である。

【語釈】 ＊豆がら・・・豆の実を取り出したあとの、さや・茎など。自分を苦しめる兄の曹丕に喩える。＊釜中・・・釜の中。＊本・・・本来は。もともとは。＊同根より生ず・・・豆も豆がらも同じ根から生まれたものだ。つまり、「私と兄とは兄弟なのだ」ということ。＊何ぞ・・・どうして。＊太だ・・・たいへん。ひどく。＊急なる・・・はげしい。ひどい

【通釈】 豆を煮るのに豆がらを燃いて煮る。豆は釜の中で、その熱さに苦しみながら泣いている。「豆も豆がらも元々は同じ一つの根から生えたのに、どうしてこうもひどく、激しく煮殺そうとするのか」と。

【作者】 曹植（そうしょく／そうち。１９２年～２３２年）は、中国後漢末期から三国時代にかけての人物。魏の皇族。豫州沛国（よしゅうはいこく）しょう県（現在の安徽省　亳州市の出身。陳王に封じられ、謚が思であったことから陳思王とも呼ばれる。唐の李白・杜甫以前における中国を代表する文学者として、「詩聖」の評価を受けた。才高八斗（八斗の才）・七歩の才の語源。建安文学の三曹の一人。

『多摩川の桜と玉川碑』

中屋保之

「多摩川へ桜を観に来ない？」と、トッコから連絡が入った。早速、『深川界隈』を散策したメンバーに声を掛ける。マーちゃんは即ＯＫ、前回、夜の部から参加してくれたエイコちゃんも同様で数日後の朝十時、小田急線和泉多摩川駅に集合した。迎えに来てくれたトッコの可愛いハイブリッド車に乗せてもらい、多摩川の土手へ。

平日のせいか、いつもより人出は少ないらしい（因みに、外出自粛要請は、この週末からであった）。桜の方は満開には少々早い状態ではあったものの春の息吹を十分に感ずることができた。ここが地元で、当日ナビゲーター役のトッコの説明を受けながら目に飛び込んできたのが、土手と多摩川の間にある「狛江の五本松」である。

調布の映画撮影所にも近く、時代劇や戦隊もののロケにもよく使われていたそうで、多摩川五十景や「新東京百景」にも選ばれている。河原には、昨年の台風の傷跡らしき流木が無残な姿を未だに晒しており、川も上流からの土砂で大きく湾曲していた。一九七四年九月に起きた台風十六号による「多摩川水害」での家屋が濁流に呑み込まれるシーンは、テレビで繰り返し放映され、ＴＶドラマでも使用された。一部の家屋に対しては流出直前、惨状を見かねた陸自部隊と警視庁機動隊の隊員が突入し一部の家財道具搬出を支援したそうで、指揮官が「電化製品には手を出すな、タンスの引き出しごと運び出せ！」と指示したという逸話が残されている。ここから少し下流にある決壊した堤防の跡に、「多摩川決壊の碑」が建てられ、自然災害の恐ろしさを今に伝えている。また、絶好のビューポイントから雪を戴く富士山を眺めると、自然の雄大さとともに畏怖の念が湧いてくる。

気になる名の通りを発見した。「万葉通り」とある。瀟洒な住宅地の一角に「玉川碑」は建っている。

多麻河泊爾左良須
弖豆久利左良左良
爾奈仁曽許能児能
己許太可奈之伎

《訳》多摩川にさらさらとさらす
手作りの布のように、さらさら
にどうしてこの娘がこんなに可
愛いのだろう
万葉集巻十四　作者不詳

［若い娘を愛おしく思う恋歌］

万葉集の東歌の一つである。当時、文字というものを持たなかった日本人が中国から伝えられたばかりの漢字を使って必死に日本語を表そうと頑張ったのがこの碑にある「万葉仮名」である。漢字のもつ意味を捨て、音だけを用いて日本語を表音的に表記したもので、万葉集に多く用いられていたため「万葉仮名」と呼ばれる。

歌碑の歴史は古い。最初の碑は、寛政の改革の実行者である奥州白河藩主松平定信により、文化二年（一八〇五）に建立されたが、二十四年後、多摩川の氾濫により流失、行方不明となってしまった。高さ二・七ｍ、幅一・四ｍの現在の碑は、松平定信を崇拝していた渋沢栄一の主導で大正十一年（一九二二）に再建されたものである。

正面に松平公の拓本を摸刻、背面には旧碑の碑陰記（碑陰＝石碑の裏面）と渋沢栄一による碑陰記が刻まれている。再建にあたり、総費用を五千円と見積もった渋沢は、自ら勧進帳を作り二千五百円の寄付を申し出たそうである。大正十年の大卒銀行員の初任給が五十円だったという。賛同者には、三菱合資会社、大倉喜八郎、安田善次郎、団琢磨など錚々たる名士の名がある。

来年のＮＨＫ大河ドラマは、渋沢栄一だとか。

参考文献　東京都文化財情報センターＨＰ　など

野村克也氏の逝去を悼み作有り

横山精真

死を賭し望みを繋ぐは母を思うの情
誰か知らん貧居遂に名を成すを
三冠の采配孫子の如し
善道人を遺して一生を完うす

悼野村克也氏逝去有作

賭死繋臨思母情　誰知貧居遂成名
三冠采配如孫子　善道遺人完一生

（語釈）○貧居・・・貧しい家。ここではその家の人。　○三冠・・・野村選手は戦後初の三冠王に輝いた。○孫子・・・呉の孫武の敬称。孫武が著した兵法書。戦略・戦術を総合的に説いて思想性を持つ。○善道・・・良い方に上手く導く。

（解説）野村克也氏は、選手の時よりも監督を経て晩年の彼を知ってのファンという人は多いことだろう。選手時代の「月見草」たる由縁であり、「野村監督」のイメージである。

逸話の多い人である。成功したから逸話として残っているのかも知れない。然し乍らキャッチャーの時の囁き、監督時代のぼやき。駆け引き、含蓄に富んだ解説の中に、常に笑いも伴う。

南海ホークスに入団して間も無く、解雇されようとした時の話は印象深い。「解雇されたら生きていても仕方がない。それじゃ、帰りに南海電車に飛び込みます」こいつは本当にそうするかも知れないと面接の人は思ったか否かは知る由もないが、必死の思いが解雇を留まらせ、その後は選手として人が知る成績を残したのは事実である。

そしてその名選手がやがて采配をふるい、「考える野球」を徹底させ、一方で選手を蘇らせ「再生工場」と異名をとる名監督となった。

今にして思うと解雇にまつわる話は既に人生を懸けた駆け引きに始まっている。悲痛だ。だがそれも笑いがこぼれてならないのである。

その成功も寒村で「苦労する為に生まれて来たような母」を兎に角、「楽にさせたかった」と、一心を語る時、胸が震えるような真の感動を覚える。

仏像彫刻（四）

「如来像」の特徴

藤崎　徹

・「如来」は「慈」の表現、この慈は、父親のように厳しいということである。だから如来には厳しさがないといけない。たとえば、阿弥陀如来はやさしい目つきをしているように思われがちだが、じつは「一度や二度の念仏では極楽へはつれていけんぞ。何遍でも唱えろ。」という厳しい眼差しなのである。そういう厳しさが目に表現されていないといけない、という決まりがあります。仏の姿は釈尊（しゃくそん）がモデルになっている。

「如来」は苦行して悟りを開いたときの釈尊の姿がモデルで、身には納衣（のうえ）という粗末な衣を身にまとい、いっさいの装飾品を外したために頭髪も縮れ毛の螺髪（らほつ）です。頭の頂上には智恵瘤を表す肉髻（にっけい）、その正面に朱彩した水晶をはめ込んで肉髻朱（にっけいしゅ）という智恵の光を表現し、額の眉間には白毫（びゃくごう）といって一本の白い毛が右回りに渦を巻いて光を放っております。

「如来像」は悟りを開いた人、心理に目覚めた者の意味があり、如来像は修行を経て悟りを開いた釈迦をモデルにしている。そのため質素な納衣一枚まとい、釈迦の姿の特徴である「三十二相八十種好（さんじゅうにそうはちじっしゅごう）」のうちいくつかが見られる。

・釈迦の姿の特徴を表した「三十二相八十種好」をそなえる：「三十二相八十種好」とは、釈迦の体の特徴であるが、像にはこれらすべてが表されているわけではない。仏像によく表されるものは、金色相（こんじきそう）（全身が金色に輝く）、肩円好相（けんえんこうそう）（肩が丸みをおびている）、丈光相（じょうこうそう）（体の回りに一丈ほどの光がある）、頂髻相（ちょうけいそう）（頭がこぶのように盛り上がっている）、白毫相（びゃくごうそう）（額に白い巻毛が生えている。伸ばすと約４ｍ以上もあると言われる）、長指相（手と足の指が長い）、足跟広平相（そくこんごうびょうそう）（かかとが広く平らである）、七処隆満相（しちしょりょうまんそう）（頸、肩、腰まろやかでにくづきがよい）などがある。さらに螺髪（らほつ）（修行中に伸びた毛が縮れ、一本ずつ右回りにまるまったといわれる。螺は巻貝のこと）、三道（首の三本の線。釈迦の頸のくびれをあらわしている）や、縵網相（まんもうそう）（指の間に水かきのような膜がある）などが挙げられる。

・「如来像」の身につけているもの・

「如来像」は出家して悟りを得た釈迦の姿をとるために、基本的に持物は一切持たず、質素な一枚の納衣を身につけてい

るだけである。この衲衣の着方には、左肩から右肩にかけて両肩をおおう「通肩（つうけん）」と言われるものと、左肩をおおい、右肩を出す「偏袒右肩（へんだんうけん）」の二通りがある。ただし、生まれた直後の姿を表す「誕生釈迦仏」は、衲衣をまとわず、上半身が裸形で、足首あたりまでの短い裙（くん）（下半身をおおう巻きスカートのような布）をつけている。「如来像」の基本と制作ポイントとして説明されている釈迦の姿の特徴を表した「三十二相八十種好」は制作者として可能な理解をしておかなければならない。「三十二相八十種好」とは釈迦の体の特徴であるが、仏像にはこれら全てが表されているわけではありません。

「如来の三十二相」

1 足下安平立相（そくげあんぴょうりゅうそう） 足が偏平足である。
2 足下二輪相（そくげにりんそう） 足の裏に千輻輪という吉相がある。
3 長指相（ちょうしそう） 手と足の指が長い。
4 足跟広平相（そくげんごうびょうそう） かかとが広く平らである。
5 手足指縵網相（しゅそくしまんもうそう） 手足の指の間に水かきがある。
6 手足柔軟相（しゅそくにゅうなんそう） 手足が柔らかい。
7 足趺高満相（そくふこうまんそう） 足の甲が高い。
8 伊泥延膝相（いでいえんしつそう） 膝は鹿のようにしなやかである。
9 正立手摩膝相（しょうりゅうしゅましっそう） 立つと膝まで手が届く。
10 陰蔵相（おんぞうそう） 性器は体内に隠されて見えない。
11 身広長等相（しんこうじょうとうそう） 身長と手を横に伸ばした長さが同じ。
12 毛上向相（もうじょうこうそう） 毛は上向き。
13 一一孔一毛相（いちいちくいちもうそう） 毛穴には青毛が生えている。
14 金色相（こんじきそう） 全身が金色に映える。
15 丈光相（じょうこうそう） 体の回りに一丈ほどの光がある。
16 細薄皮相（さいはくひそう） 皮膚は薄くつややか。
17 七処隆満相（しちしょりゅうまんそう） 頸、肩、腰まろやかで肉づきがよい。
18 両腋下隆満相（りょうえきげりゅうまんそう） 腋の下の肉づきがよい。
19 上身如獅子相（じょうしんにょししそう） 上半身は獅子のように立派。
20 大直身相（だいじきしんそう） 体はすっきりとしている。
21 肩円好相（けんえんこうそう） 肩は丸みをおびている。
22 四十歯相（しじゅうしそう） 歯は40本あり歯並びがよい。
23 歯斉相（しせいそう） 歯は大きさが均等で隙間がない。
24 牙白相（げびゃくそう） 上下4本の犬歯は白く美しい。
25 獅子頬相（ししきょうそう） 頬が獅子のようである。
26 味中得上味相（みちゅうとくじょうみそう） 食べるものは最高の味。
27 広長舌相（こうちょうぜつそう） 舌は顔をおおうぐらい長く広い。
28 梵声相（ぼんじょうそう） 神々しい声を有する。
29 真青眼相（しんしょうげんそう） 目は青く、紺青のよう。
30 牛眼睫相（ごげんせいそう） 牛王のように美しい目。
31 頂髻相（ちょうけいそう） 頭にこぶがあるように盛り上がっている。
32 白毫相（びゃくごうそう） 眉間に白い巻毛がはえている。

「星野源さんの『よみがえる変態』を読ませていただきました」

今泉 由利

「今度、星野源さんと仕事することになった！」とNYから仕事で日本に来ていた玉由が、三冊の文庫本を、私の机に置いて、帰っていった。

隠したり、気取ったりしない。何ごとにも素直に、本人の本当の言葉で、リズミカルに…心地良く。どんどん読み進んでしまった。そして、心に残ってしまう。真実の言葉が愛おしい。

☆世界は　ひとつじゃない

ああ　そのまま　ばらばらのまま

世界は　ひとつになれない

そのまま　どこかにいこう

☆昔から、葬式や墓参りをした後にはなぜか元気がでる。死に直面した後は、気持ちが「生きねば」と自然にポジティブになる。その仕組みはいまだによくわかっていないけど、それが長く生きるためのヒントなんじゃないかとも思っている。

アルバムの曲づくりの締め切りは刻々と近づいてきている。何処かに逃亡したいが仕方ない。とりあえず、次のアルバムには墓参りの曲が入ることになるだろう。

☆なぜ自分は今までこんな風に素直に日本を楽しんでくることができなかったのか。性格的なものか、それとも国全体のムードだろうか。「この国が好きだ」と発言することに対して後ろめたさを感じるような教育を受けたせいもあるかもしれない。どちらにしても人の目を気にするのが普通だ。

☆「ものづくり地獄」とは、作っても作っても満足できない制作作業のことを言う。たまに「これはすごいものができたぞ」と思えても、しばらくすれば「まだまだ」「さらにすごいものを」と求めて彷徨い繰り返す。今回も今は達成感でいっぱいだけど、何ヵ月か経てば、「もっとこうすればよかった」という想いがマグマのように溢れ出てくるはずだ。

☆人はどこから来てどこへ行くのかという問いはベタであるけれど永遠の謎で、答えは死んでみないとわからない。けど死んだら無になるから結局わからない。答えは出ないので考え続けるしか、生き続けるしかない。それはものづくりも一緒だ。答え＝死ぬのと同じで、満足＝引退だ。本当に心の底から満足してしまったら、私の音楽人生は終わるだろうとぼんやり思う。

☆「一部の人だけ聴いてくれればいい」なんてつまらないことは死んでも言わない。「どんな方法でもいいから売れたい」なんて恥ずかしいことは死んでも思わない。自分が面白いと思ったことを満足いくまで探りながら、できるだけたくさんの人に聴いてもらえるように努力する。生きるとは、自分の限界を超え続けることであり、生きるとは、死ぬまで諦めないことである。

☆昔から勉強が嫌いなので、専門学校で教わるような音楽理論はわからない。だから今でも楽譜が読めないし書けない。とにかく歌って憶え、良いメロディができたらそれをテレコに録音し、歌詞を思いつけばノートに書く。演奏してもらうミュージシャンを考える。僕の楽曲は全て自分でプロデュースしているので、バンドメンバーやレコーディングエンジニア、作りたい音に合いそうなスタジオも自分で決める。

次に楽曲の編曲をする。スタジオ入り、演奏者たちに口伝えや実演をしながら、その場で編曲していく。

細かく指定しすぎれば気に音は固くなってしまう。そこで、音楽用語以外の言葉を使って、想像力で演奏してもらうと、演奏が豊かになる。

演奏者自身の脳内で想像し、さらに音に変換して、演奏するから、音に自主性と生命力が宿る。そうなればどうやっても機械的な演奏にはならないし、しかも楽曲に自我が入り込むわけだから、演奏者として充実感も高くなり、楽しそうに演奏してくれる。

つづく

「氷魚」のことから（232）

岡本八千代

新型コロナウイルスに世界中がおびやかされている。どうか終結するように。祈るばかりである。

そのような中で、なんとかペンを持つことができることを感謝する。緊張のまっさい中であるのに、茂吉のユーモアのことから書いてみたい。

上田三四二著の「短歌一生」の中で「五十歳前半の斎藤茂吉はその恋人に与えた手紙に彼自身をたしか『禿げ頭の老翁』と自嘲していた」そうである。……現代の青年男子諸君からはおよそ考えられない自嘲のことばだ。令和の今だからこそ私はユーモアとしてとりあげてしまったが、昔は人間の寿命も短かったから、茂吉の本心であったかも。

さて、茂吉は、精神科の医者として、養父の後を継いで勤めあげた。――。

茂吉は、実は、明治38年（１９０５年）一月、貸本屋から「竹の里歌」（子規の歌）を借りて読んで、作歌を志したのであった。この時、養父の斎藤紀一の二女てる子の婿養子に入籍。

・明治39年（25歳）３月、伊藤左千夫宅訪問。初めて「馬酔木」に歌載る。

・明治42年（28歳）１月、森鴎外の「観潮楼歌会」に列席した。

・明治44年（30歳）この年より大正三年まで「アララギ」の編集担当した。

・大正２年５月生母いく没した。十月、第一歌集「赤光」を東雲堂より刊行した。

まず、ここまで書いてきて、思ったことははやくから「アララギ」にかなり若い頃から自分を医者であっても、文学に心を注いでいたことがわかった気がする。

この歌集「赤光」は歌壇だけでなく、文壇全般に大きな反響を呼んだのであった。「赤光」は明治38年から大正２年の間に詠まれた８３４首の短歌からなっている。言葉づかいは、「万葉集」を思わせるようなところがあるが、内容は「古風というには程遠く、際立って近代的な感性を表わしていた」と言われていたのであった。この歌集は、いくつかの連作からなっていること、それぞれに、「蛍と蜻蛉」とか、「死にたまふ母」などの題がつけられていることなど当時としては新鮮であったと思う。とくに母の死の歌は、実母を詠んで59首もある。それは、作者の急ぎの帰郷、母親の枕元の看病、葬式と火葬のこと、また作者自身のその後の回復を描いていた。

〝死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはず天に聞こゆる〟

I lie beside my mother
Who is close to death —
Piercing cries
Of frogs in distant fields
Echo from heaven.

こうして書いてみると、やはり日本人は日本のひらがなと漢字の交じった文字は美しい。

編集室だより【二〇二〇年三月】

今泉　由利

○新型コロナ騒動に、気が転倒する。そして、これで自分の命が終りになるのだろうか…。やりっぱなし、積みあがる物々。まずこれを何とかしなければ。

○アルゼンチンと、日本と、何らかの役に立ちたかったから作った会社も、このまま続けたら自分は一文無しになってしまう。それでは困ると、その会社の莫大な書類。一枚一枚破っていたら親指がふくれあがった。それでも続ける。

○もうすでに、裸婦クロッキーとか、途上中の紙類。処分しているのにまだまだ。スリッターを買ってくれば良いのだけれど、今あるものを捨てるのが本意なのでこれで終わりだから、買いたくない。

○習い事は全部休講になってしまったから全部の時間を、この作業に当てている。

○ＮＹの子達から、ＮＹ発注で、自衛グッズがどんどん宅配されてくる。「一歩も家の外へ出てはいけない」と。

○「死にやすくなっているのだなあ」との認識を得ると、生れ育った頃のこと、父のこと、母のこと、沢山思い出して、しっかり昔にひたってしまう。

○ビリビリ破っている範囲ではないものもまだ山ほどあるから、おとなしく片付け、除菌掃除をしていよう。

○この騒動が終ったら、身も心も新しい自分になって、自分を満足させてあげるように暮らそう。

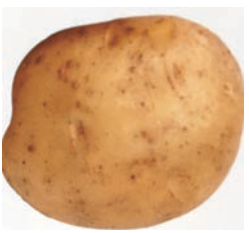
○父が、学生時代から続けてきた、三河アララギ短歌誌を、外国に住んでいた時限で「父を助けなければ」と感じ、日本に帰ってきた。それも何時だったか！忘れてしまうほど〝昔〟のこととなってきた。

この小誌を、父と母とに、心の中で相談しながら、父と母とお仲間の皆様のお助けをいただきつつ、毎月々のリズムに乗って、命の限り続けてゆきます。

○明治三十年代を境にして、それ以前の作品を和歌といい、それ以後の作品を短歌と呼ぶ、ということです。私は、和歌というほうが好きだ！と思います。

○母が持たせて下さったお弁当には、千切にした人参を、バターでいためたのが、毎日入っていました。本当に好きでした。あの時の味、今でもしっかり覚えている。

野菜・果物・まんだら　（27）ジャガイモ　馬領薯
ナス科・ナス属・多年草



○南米アンデス中、南部。3000m以上の山岳地域原産。紀元前から栽培されていた。

○とうもろこしと共に、インカ文明の食生活を支えた。

○16世紀末頃、オランダ商船により、ジャカルタから日本へ渡来した。

○男爵いもは、アメリカから移入。メークィンはイギリスから。日本で品種改良されたものに、農林1号、紅丸、出島、アンデスレッド、ベニアカリ、キタアカリなどなど。

○ナス、ジャガイモ、トマト、ピーマン・・・・ナス科。

○ジャガイモの花が終るころ、土中の茎に栄養がたまる。

○一年のうち、複数回収穫が出来るといい、食料不足の危機を何度も救ってきた。

○花が散ると小さなトマトのような実がなり、そこから種がとれる。その種からも栽培出来る。

○ジャガイモに含まれるビタミンB1には、糖質をエネルギーに変え、代謝をあげると同時に、乳酸を分解してエネルギーに変える効果がある。疲労を除きつつエネルギーを生みだす効率。ジャガイモにふくまれるビタミンCは（でんぷん質に守られ、加熱しても壊れにくい。）コラーゲンの生成を促し、皮膚の粘膜強化、細菌やウィルスへのバリア効果、動脈硬化、脳卒中など生活習慣病の緩和に。

○ジャガイモは温性で、体を温めてくれる作用があり、カリウムが塩分調整を促し、血液循環を活発にする。食物繊維効果が高い。

○フランスルイ16世が飢饉を救うため、宮殿にジャガイモを育てた。なかなか人々に受け入れられなかったが、舞踏会の出で立ちのマリーアントワネットは、ジャガイモの花を装って、普及のプロパガンダにした…という。

○ジャガイモの花言葉「思恵」「慈愛」「慈悲」「情け深い」。

今泉由利

第三十四回

全国短歌フォーラム in 塩尻

短歌と出会えるまち「塩尻」。短歌で思いを表現する文化を大切にし、短歌のすばらしさを全国に発信しています。

題詠「雲」

※「雲」の単語を詠み込まなくてもよい

投稿歌募集

申込締切 6月19日(金)

ホームページからも投稿できます。

■応募規定　一人二首まで。自由題一首と題詠歌一首の合計二首(どちらか一首でも可)
題詠「雲」※投稿は自作未発表作品に限る

■投稿料　1,000円(一人あたり、一首二首同額)

■作品集代　1,000円(希望される方は投稿時にご注文下さい。)

■応募方法　所定の投稿用紙か400字詰め原稿用紙の右半分に作品・左半分に住所・氏名・電話番号・当日参加の有無を記入し送付ください。

■払込方法　定額小為替(郵便局で購入)を投稿歌に同封するか郵便局備付払込取扱票で「口座番号00560-6-83649 全国短歌フォーラム実行委員会」に振込

■申込締切　6月19日(金)(当日消印有効)

■主催　長野県塩尻市／塩尻市教育委員会／全国短歌フォーラム実行委員会

■大会期日　9月26日(土)・27日(日)

■会場　塩尻市文化会館 レザンホール

■選者　佐佐木 幸綱 氏・永田 和宏 氏・小島 ゆかり 氏

■大会内容　投稿歌選評、表彰式、トークショー

■表彰　最優秀賞・優秀賞・入選・奨励賞

■発表　フォーラム当日と全国短歌フォーラムホームページ https://tanka.shiojiri.com/

■申込先　〒399-0738 長野県塩尻市大門7-4-3 全国短歌フォーラム事務局 電話 0263-52-0903(直)　ファクス 0263-53-7604

※ご連絡くだされば募集要項(投稿用紙)をお送りいたします。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL　(〇三)　五九二四-二〇六五

◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制　廃止。

◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。

◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九

◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
今泉由利　宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。